

第46回 骨粗しょう症のくすり

骨粗しょう症は日本において 1100 万人の患者がいると推計されており、これからも高齢化するにしたがって、増加が見込まれている疾患です。世間に流通しているイメージ通り、骨がスカスカになってもろくなってしまいう病気なのですが、初期段階では自覚症状がないことも多く、骨折してようやく骨粗しょう症であると気づくことも少なくありません。骨粗しょう症で起こる骨折で最も頻度の高い部位が「椎体（ついたい）」と呼ばれる部分です。椎体は背骨の一部分で、ここが骨折を起こすことにより、姿勢の悪化や慢性の腰痛・背部痛を起こしてしまいます。また、体が前にかがんでしまうことによって、呼吸への悪影響や、消化器への障害なども起こる可能性があります。他には、しりもちをついたりしたときにふとももの付け根部分（大腿骨近位部）を骨折することも多く、寝たきりになってしまったり、歩くのが困難になってしまうなど著しく QOL（生活の質）を落としてしまう結果になってしまう可能性が高いです。

人間の骨は一度作られたら、そのままというわけではなく、骨の中では日夜、新しく作られる作業と、古い骨を壊す作業が繰り返されています。正常な人であれば、このバランスが保たれているために、骨がもろくなることはないのですが、さまざまな要因からこのバランスが壊れて、骨を壊す力が強くなると骨粗しょう症になるといわれています。その原因の一つにホルモンの影響があり、特に女性ホルモンには骨を作る効果を高める力があるため、女性ホルモンの分泌が低下する閉経後では骨粗しょう症が発症しやすくなります。

骨粗しょう症の治療は現在の治療では骨の吸収などを調節する働きのあるビタミン D を補充する方法や、骨を壊す作業を抑える力のあるビスホスホネート製剤や閉経後の女性ではホルモンに働きかける薬などが多く使用されています。

それでは、当院に採用されている、骨粗しょう症の薬でなまえの由来があるものをいくつかご紹介します。

ボナロン：骨粗しょう症治療薬の標的組織である骨 (Bone) とテトロン、ベニロン等、
帝人製品に以前より用いられている接尾語（～ロン）を組み合わせるとして
ボンロンとした

ボナロンはビスホスホネート系に属するくすりです。ビスホスホネート系の薬は、飲んだ後、30 分横になったり、食べ物を食べてはいけないなどと制約の多い薬ですが、骨粗しょう症を改善する効果は高く、広く使用されている種類の薬剤です。以前は 1 日 1 回のまなければならなかったのですが、最近は 1 週間に一度でよくなり、今後は 1 か月に 1 回、年に 1 回でいい薬も登場する予定になっています。

アルファロール：一般名 1 α -hydroxycholecalciferol より Alfarol とした
アルファロールは活性型ビタミン D 製剤です。ビタミン D はカルシウムを吸収促進する力があり、さらに骨を作るのも活性化するため、転倒し骨折の危険のある高齢者や腎臓が悪く、カルシウム吸収力の落ちている人に用いられます。

次回は、肝炎ウイルスに効果のあるくすりです。